
いつか太陽に

桜浪貴途

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつか太陽に

【Nコード】

N1438Z

【作者名】

桜浪貴途

【あらすじ】

夕風太陽は『名前負け』と呼ばれる少年。自分を嫌い、世界を嫌う彼は変わることが出来るのか。又は変えることが出来るのか。名前で戦う物語始まります。

序章 名前負け

夏休み前日の放課後、終業式を終えた夕凧太陽は体育館裏にいた。授業が終わり、帰ろうとした彼を引き止めたのは同級生の男子達だった。

今時、体育館裏ってなんて、と思いながら太陽は冷静だった。

彼にとってはよくあることだ。

なぜなら彼は・・・

「ぐあっ!!」

左頬を殴られる。

（はは、今時、体育館裏か）

尻餅をつき左頬を押さえながら太陽はそんなことを思う。

「おいおい、どうした？」

三人組の男達の今太陽を殴った男が嫌み混じりに言った。

「やっぱりてめえは『名前負け』野郎だなあ」

その『名前負け』という言葉聞き太陽の肩が震える、震えは体に広がり太陽は立ち上がった。

しかし、

「・・・・・・」

彼は何も言えなかった。

「まあお前が『名前負け』のおかげで俺たちは生きてるらしいけどなあ」一人がそう言い、

「夏休み前にたっぷりと殴らせてもらうぜ!!」

もう一人がそう言うと言員で太陽を殴り始めた。

殴る、殴る、殴る、蹴る、蹴る、蹴る

太陽はそのまま何の抵抗も出来ず、何の反論も出来ず意識を手放した。

第一章 関わり合うこの世界（一）

二〇年前から日本で生まれる子供に親が名付けることが出来なくなかった。

生まれたばかりの子供の額に文字が浮かび上がり、親はなぜかその文字を名前にしてしまう。

一部では神からの贈り物だと述べる者もいるがそう思っても仕方ないだろう。

なぜならその名前には『力』が宿っているのだから。

この力を後に【名技】と呼び、名技を持つ者を【名手】と呼ぶ。名手の中でも特に優れた名技を持つ者を【名将】と呼ばれた。

名技を最初に発現した者は雪代白染という子供だった。

彼は一〇歳で名技に目覚め、その名のとおり『全てを白く染める』力を持っていた。

だが彼が名技を使ったのは一度だけである。『この世にある兵器を全て白く染める』

これは今現在ある兵器だけでなく記録も作り方も未来永劫消す、という意味合いであった。

こうしてこの世界から兵器はなくなり名技だけが残った。

十

夕風太陽は携帯の着信音で目を覚ます。

「ぐっ、くそっ誰だよ」

体中の痛みに耐えながらポケットから携帯を取り出す。

「未重か」

相手を確認し倒れまま電話に出る。

「あっ太にい？」

あかしみしげ

明石未重の声を聞き太陽は眉を歪ませる。

「おい未重、僕のことはそっちで呼ぶなって言ってるだろ。それに
お前は妹じゃない僕は一人っ子だ」

「はいはい、夕にいね夕にい」

軽い感じで言う。

「それに妹じゃないって殆ど妹みたいなもんじゃない？ウチ」

「違う、お前は一つ下の赤の他人だ」

太陽は突き放すように言う。

「皮肉はいいから」

「皮肉じゃない、僕は・・・一人ぼっちさ」

太陽は自分に言い聞かせるように、最後の方は呟くように言った。

「僕は『名前負け』だからな、親にももう見放されたよ」

未重が言い返すより先に言葉を紡ぐ。

「太にいは『名前負け』じゃ」

「お前には分からないよ一〇人しかいない名将『十将』の一人のお
前には絶対に分からない」

未重がすべてを言い終わらないうちに太陽は彼女の言葉を遮った。

「そんなことないよ」

弱々しく未重は言った。

「そんなことあるんだよ！！だから僕は今こうして、いつっ！」
否定しようとして体まで動かしてしまった。

「どうしたの？！」

未重は太陽の様子が変わり慌てて聞いた。

「何でもない、ちょっと躓いただけだ」

事実を隠す。

知られたくなかった。

だから平気で嘘をつく。

「太にい」

未重は諭すような声で太陽を呼ぶ。

「ウチ知ってるよ、太にいが嘘ついてるの」

しかし未重はそんな彼の嘘を気づいていた。

「すぐ行くからどこにいるの？」
だが・・・・・・・・

「・・・・・・・・」

太陽は電話を切った。

何の躊躇も迷いもなく切った。

自分を心配してくれた自称『妹』を断ち切った。
人との繋がりを簡単に切れる。

彼はいつでもこんな風に生きてきた。

十

太陽は自称妹との通話を終えた後に体を休ませて今は高校の帰り道を歩いていた。

（あいつ、今も僕のこと探してるのか？）

そう思った後未重にメールを送った。

『大丈夫だから、お前は帰れ』

すぐに返信はきた。

『わかった』

とだけ書いてあった。

その内容にほっとした太陽は夕食のことに頭をシフトチェンジした。

太陽は学校の寮に住んでいるが食事は出ないので自分で用意しなければならぬ。

名手たちは日本に重要視されている、だから学費や生活費は支給される。太陽一人分の食費は余裕であるので問題ない。むしろ余るくらいである。

（夏休みになるし冷やし中華にでもするか）

太陽が夕食を決めて商店街に向かおうと曲がり角を曲がると、

世界が白く染まった。

夏なのに目の前一面雪景色になったかのように見えた。

太陽が目を擦り再び目を開けると、

そこには雪景色ではなく真っ白い少女がいた。

白くて儚い少女。

そんな印象だった。

その少女は異様な雰囲気を放っていた。まるで近づくものを消してしまうような。

太陽は息を呑んだ。

そんな少女が、

犬に襲われていた。

「・・・・・・・・」

白い少女はワンピースを着ていた。背中には羽にも見えるヒラヒラが着いている。そのヒラヒラが引っ張られていた。（このパターンはやばいっ）

太陽は来た道を引き返そうとした。

が、時すでに遅し。

白い少女に絡んでいた犬が太陽に向かってきていた。

「やっぱりこのパターンかよ！」

尻噛まれた。

「ぎゃー！！」

太陽は逃げようとするが、ガッチリ尻をやられている。

「痛い痛い痛いいいい」

太陽は昔から動物を引き寄せる体質だった。名技とは関係なし。

この犬は獰猛だったようだ。

「ローズヴェルトー帰るわよ」

その声を聞くと犬は走り去っていった。

犬から解放された太陽はうつ伏せになっている。

（ローズヴェルトって）

太陽が泣きそうになってると上から声がした。

「大丈夫？」
だった。

これが夕風太陽とマシロ・スノーホワイトの出会い

第一章 関わり合うこの世界（二）

十

ここ上那市かみなしは北が旧市内、南が新市内に分かれている。新市内には港があり外国からの船も多く来ている。

そんな新市内の港に一人の男がいた。

「ああ、今着いた。これからあいつを探す」
誰かと電話をしているようだ。

「ああ、頼むよ桐島君彼女は私の大事な実験台だからね」
電話の男はうへへと笑う。

桐島と呼ばれた男は電話の男の言葉を聞き顔を歪ませる。

「貴様は本当にに気持ち悪いな、どうにかならないか？」

桐島は嫌みを込めてそう言う。

「誉めないでくれよ、桐島君。君らしくないよ」

「誉めてねえよ」

桐島はそう言ってから舌打ちをする。

「でも私は心配だよ桐島君」 電話の男は急に話を変えた。

「何がだ？」

桐島は意味が分からなく質問する。

「君が彼女を力づくで連れ帰れるかってことさ」

その言葉を聞き、桐島は眉間に皺をよせる。

「貴様に心配される筋合いはないな、俺は力づくであいつを連れ帰る、俺の目的にはあいつが必要だからな」

桐島の眼が鋭くなる。

「まあそれならいいや、じゃあ早く連れて帰ってきてね」
そう言うのと電話の男は電話を切った。

桐島も電話を切りポケットにしまうと歩き出した。

夕風太陽は尻の痛みには耐えながら上から見下ろしてくる少女を見た。

白と思っていた二カ所だけ色が違っていた。

青い瞳。

白の中に青が二つ、黒よりもむしろ目立っているように見える。

「大丈夫ですか？」

太陽が返事をしないのでマシロはもう一度聞いた。

「あ、うん平気です」

ボソツと小さい声で答えた。太陽はいつもぼっちだから人と話すのが苦手だ。

「あの、お尻痛いですか？」

太陽の小さい声は彼女に届いていたようだ。

（外人か？その割に日本語うまいな）

「？」

マシロは太陽から何の返答もなかったため、首を傾げた。

「大したことないです。慣れてるんで」

「そうですか」

「・・・はい」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

ぐう、という音が聞こえる。

腹の音。

「それじゃあこれで」 太陽はそそくさと商店街に向かおうとした。袖を掴まれた。

「・・・」

マシロが太陽の目を見つめる。

「……」

（なんだこの目、なんだこの目）
嫌な予感がする。

「いや、無理だよ。僕一人暮らしだし、女子禁制だし、その他諸々あるし」

「……」

マシロはずっと太陽を見ている。

（なんで僕がこんな目に）

太陽は焦燥感に襲われた。

「……」

しかし彼女はそんな太陽の心根も気にせず見続ける。まるで小動物のような目だ。

「お願いします。私、六時間何も食べてないんです」

「普通だ！」

「私にとっては死活問題なんです！」

「キレられても困る！」「いいじゃないですか、少しくらい」

「少して何だ！」

太陽とマシロは同時にはあ、と溜め息をつく。

「いや、何で君も溜め息ついてんの？」

「日本人はみんな親切と聞いてたからちょっとガッカリしただけです」

マシロは両肩を上げながら言う。

「その情報は間違ってる。それに僕は特別だ」

「何ですか？」

太陽は鼻高々言う。

「僕が人の不幸を喜ぶ人間だからさ」

「最低です」

マシロは速攻言い返した。

「僕だけこんな不幸なんておかしいだろ。だから人の不幸を見ると

心が休まる」

「いや、知りませんが、最低ですね」 マシロは蔑んだ目で太陽を見る。

「（初対面の女の子にどうしてここまで言われなきゃいけないんだ？）」

太陽は呟いた。

「いいから私にご飯をください！！」

「は、はい！！」

いきなりキレるマシロにビビって返事をしてしまう太陽。

ビビり太陽。

「はぁ、なにこれ」

+

太陽とマシロは太陽の最初の計画通り商店街に向かって買い物を済ませた。商店街の人達に色々言われていたが太陽は何一つ話さなかった。

太陽は人見知り。

だからマシロと話せた自分に驚いていたりする。

「なぜあなたはあの人達と話さなかったんですか？」

「話さなくても問題ないから」

太陽は冷めた目をしながら答える。

「問題ありますけどね」

「・・・」

マシロがそう言うが太陽は無視した。

太陽の違う様子に気づいたのかマシロは話を変えた。

「そういえばあなたの名前聞いてません」

「・・・教えない」

名手にとって名を名乗るということは自分の力を明かすようなものだ。だから普通は名乗らない。

しかし、太陽が明かさない理由は別にある。
名前負け。

これである。

「いいじゃないですか・・・教えてくれない理由がわかりません」

「わ、わかったよ・・・夕風だ」

太陽はマシロが凄んできたため答えた。名字だけ。

「それ名字ですよ。名前は？」

「絶対教えない」 「・・・わかりました。名字で手を打ちましよう」

今度は太陽が凄んだのでマシロはこれ以上の追求を諦めた。

「では夕風」

「いきなり呼び捨て?!」

「文句あるんですか？」

「いえ、ないです」

ビビりな太陽はとことんビビり。

「では夕風、私の名前を教えましょう」

マシロは上から目線的に話す。

「別にいいよ。ご飯奢らされてそれで終わりなんだから」

「そうですけど、名前を名乗るくらいいいじゃないですか」

突き放したように話す太陽にマシロは普通に答える。

「まあ別にいいけど、それより部屋着いたぞ」

話しているうちに太陽の部屋に着いた。

「じゃあどうぞ」

「待ってください」

マシロは自分を入れようとした太陽を止めた。

「まだ名乗ってません」

「ああ、そうだな。じゃあどうぞ」

マシロはこほんと咳払いをして、

「私はマシロースノーホワイトと言います」

「はい、わかりました。じゃあ飯作るから」

「何ですか？その態度怒りますよ」

「すいません」

この二人の上下関係がだんだん形成されていってる。

「（何で僕がこんな扱い受けなきゃいけないんだ）」 「何か言いました？」

「何も言ってません！すぐご飯を用意します」

そう言うと太陽は台所に走っていく。マシロも玄関の扉を閉めて中に入った。

第一章 関わり合うこの世界（三）

十

太陽が冷やし中華を作る間にマシロは漫画を読んでいた。

「（手伝わないのかよ。勝手に読んでるし）」

「何か言いました？」

「耳良すぎない？」

小さい声で呟いたのだがマシロは聞こえていたようで言い返してきた。

「私、料理出来ないんです」

「そうですか。まあ何となくそんな気はしたけど」

そうこうする間に冷やし中華を完成して太陽はテーブルに運んだ。マシロも漫画を読むのをやめて近づいてきた。

「……」

マシロが冷やし中華に興味深そうに見つめていた。

「見たことないのか？」

「はい、ないです」

「ふーん」

太陽は興味なさそうに言う。

「まあ食べてみましょう」

「どうぞ」

太陽がそう言うのとマシロは箸をうまく使って食べた。

「……」

太陽は何となくマシロの反応が気になり顔を見つめる。

「何ですか？人の顔ジロジロ見て」

マシロの気に障ったようだ。

「いや別に、ただ箸使うのうまいと思ったただけだよ」

本当は味の感想が気になったのだがひねくれ太陽は嘘ついた。

「私が外人に見えるんですか？」

「いやそうだろ、むしろ外国でも珍しいじゃねえの？ 白いし」

「まだまだですね。夕風」

「えっ！ 日本人なの？」

「いえ、違います」

「何なの！？」

「ハーフです」

「ああ、なるほどね」

（結局白いのって珍しいよな）

太陽は納得したようできていなかった。

「頭が悪いですね。少し考えればわかることですよ？」

「悪かったな！！ じゃあ言わせてもらおうけど！！ お前口悪いぞ！！」

太陽は凶星をつかれて喚きだした。

「これは私の個性です」

「いやな個性だ！！」

「個性がないあなたよりマシですね」

「うっ」

また太陽は凶星をつかれた。

「そ、そんなことないぞ。僕にもあるぞ。個性」

「じゃあ言ってみてください」

マシロを太陽に近づき追求する。

「髪だ！ 色の抜けた黒髪！ これ個性だろ！！」

「そんな人一杯いますよ。それにそんなこと言ったら私、白ですよ」

「ぐうう！」

反論出来ない太陽。地味太陽。

「な、なら！ 卑屈な所、皮肉な所、ぼっちな所！！」

「自分で言ってて悲しくありませんか？」

「別に」

マシロは可哀想な物を見るような目で太陽を見る。そして溜め息

をついた後に言う。

「どうしようもないですね」

「その目はなんだ。その目は」

「あなたの期待通りの目です」

「期待なんてしてない!!」

太陽はそう言うがマシロは無視して冷やし中華を食べている。

「それにしても冷やし中華ですか？なかなか美味しいですね」

太陽はやっと感想を貰えてにやりと笑う。

「だろ」

「その顔気持ち悪いです」

「はっきり言うな」

「ついでにその長い前髪も気持ち悪いです」

「これは人と目を合わせない為のものだ」

「やっぱり気持ち悪いです」

「ひどくない？」

太陽は大きな溜め息をついた。

十

新市内の港。

桐島がいた港にもう一隻船が到着していた。

そこから出てきたのは少女だった。

ゴスロリを着て手には日傘を持っている。

ゴスロリ少女は携帯電話を取り出しどこかに掛けた。

「はかせえ着きましたよお」

やたら語尾を伸ばす喋り方をする。

「雨乞くん着いたんだね。いやあ悪いね君にまで行ってもらっちゃ
あまごい
つて」

どうやら話しているのは桐島と電話していた男のようだ。

「全然問題ないですよお。アキバにも行ってみたいですから」

雨乞はニコニコしながら言う。

「そうかい？それなら良かった」「あたし早くアキバに行きたいですからあ仕事始めていいですかあ」

ニコニコしながら言う。

「仕事内容わかってる雨乞くん」

「わかってますよお。きりちゃんの援護をしてえそれかきりちゃんが裏切るような行為を取ったら私が変わって彼女を連れ帰る、ですよねえ」

ニコニコしている。

「うんうん、わかってるね。桐島くんは怪しいところがあるからね。頼むよ」

「はあい」

ニコニコしながら言う。

「それはそうと、ねえはかせえもしきりちゃんが機関を裏切るような行為を取ったら殺していいんだよねえ」

雨乞はそんな恐ろしいことをニコニコしながら言う。

「そうだね。そうだったら仕方ないね」 はかせと呼ばれた男も彼女のことをよく知っているのか普通に返答していた。

「りょうかあい」

そう言った雨乞は最後にニコニコしていた顔を歪んだ笑顔にしていた。

+

マシロは最後の一口を食べた。

「ごちそうさまでした」

「お粗末様でした」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・」

二人の間に沈黙が続く。

太陽が口を開いた。

「帰らないのか？」

太陽の言葉を聞いてマシロは眉を少し動かした。

今まで無表情だった彼女の顔に起きた少しの変化だった。

「いなくなって欲しいんですか？」

「いや、それはその・・・・・・」

マシロの言葉を聞いて太陽は言いよどむ。

太陽は自分の心がよく分からなかった。一人でも平気だったはずなのに今は言い知れない思いに襲われていた。

「冗談です。出て行きますから・・・・・・結局、私の名前一度も呼びませんでしたね」

太陽がその正体に気づくより早くマシロは話した。そして立ち上がり玄関に歩きだす。

「あ、ちよっ」

太陽は何か言おうとするが、

「・・・・・・」

何も言えなかった。

「あっ」

マシロは何かを思い出したように立ち止まり、太陽に寄ってきた。

「な、何だよ」

太陽はマシロが戻って来てちよっと嬉しくなった。理由は分からなかった。

「洗面所ってどこですか？」

マシロはそんなことを聞いた。

「？」

太陽は不思議に思ったが素直に教えた。少ししてマシロが戻ってきた。

「どうしたんだよ」

「ちよつと目閉じてもらっていいですか？」

「まあ、いいけど」

太陽は目を閉じた。

(何?何?何なの?)

太陽はドキドキしていた。

（もしかして・・・いや！僕にそんな桃色なことが起きるわけがない！！！！）

と思いつつどこかで期待している太陽。

マシロが太陽に近づく。

座っている太陽に前屈みになって顔を近づける。

(うわあ ああ ああ ああ ああ やばい だろ お おお おお おお おお)

「えい」

ジャキン、という音が鳴った。

パラパラと髪が落ちる。

[illegible]

二人の間に沈黙した。

?

?

太陽は首を傾げて、マシロも首を傾げた。

「え、え、え、え、え」

太陽は自分の状況が理解できない。

「てへ」

マシロは無表情で舌を出し可愛く言った。

太陽は洗面所に向かって鏡を見た。

そして理解した。

自分の長い前髪が短く切られていることを。

[illegible]

絶叫が寮全体に響いた。

太陽の絶叫の後に寮の管理人のお姉さんがやってきた。太陽はゴキブリを踏んだと嘘をついて何とか帰ってもらった。

玄関を閉めてマシロの近くに向かう。

「おい！ふざけんなよ！！僕の前髪どうしてくれんだよ！！」

「目障りだったの」

「それだけ！？それだけで切られたの！？」

「十分な理由じゃないですか」

「お前の感性が心配になる！！」

太陽は喚き散らした。

「ああもう！嘘だろ何でだよ何で僕がこんな目に！！」

太陽は頭を抱える。

「じゃあ私はもう行きますね」

マシロは玄関に向かう。

「これだけのことしといて行こうとするな！！」

「え？」

「何でびっくりしてんの！？」

「もう用は済みましたから」

「勝手だなおい！」

「そうですか？」

「っ！！もういいどっか行けよ！！」

「はい」

太陽はもう訳わからなくなっていた。

マシロは玄関の扉を開けて、太陽の方を振り返った。

そして

「あなたと話せて楽しかったです」

そう言っ出て行った。

「……………」

太陽は呆然としていた。

「何だよ、何だってんだよ」

太陽または言い知れない思いに襲われた。

だが、やっぱりこれが何なのか太陽には分からなかった。

+

マシロが出て行って数分後それは起こった。

「うわあああ!!」

部屋のベランダの窓を割られた。

まるで突風で破られたかのような割れ方だった。

太陽は腕を顔の前にして盾にして凌いでいた。

「う、あ!!」

割れたガラスが太陽の腕にいくつか刺さる。

ガラスが飛んでくるのが収まり太陽が腕を下ろすとそこにはフー
ドを被った男がいた。

「だ、誰だ」

太陽がフーの男に問いかける。

「貴様、あの女はどこだ」

「あの女?」

「ふん、いるはずだ白いなりをした貴様と同じ歳くらいの女だ」

太陽はそう言われ理解した。

「あいつなら出て行っただけだ」

太陽は腕を押さえながら言った。

「そうか。嘘はついていないようだな。だが、貴様には死んでもら
う」

「は?」

太陽は何を言われたか分からなかった。

「貴様を殺す」

フーダの男はもう一度言った。

「な、何で」

太陽はやっと理解し震える声で言い返した。

「貴様はあの女と関わってしまった。それが理由だ」

フーダの男は淡々と言った。

「う、嘘だろ？ そんな簡単に人を殺すなんて」

太陽の声は震えている。いや、体まで震えだしていた。

「人は簡単に死ぬ。そういうものだ」

（こいつ本気だ）

太陽は本能的に理解した。

「殺す前に名乗ろう。それが俺のルールだ」

「・・・・・・」

太陽の体はガタガタと震えていた。

「桐島だ」

桐島は凜とした声で言った。

「名字しか言わない理由はわかっているな」

「・・・・・・」

太陽は答えない。

「ふん、まあいい」

そう言って右手を上げて振り落とした。

それだけで太陽の体が後ろの壁まで吹き飛ばされる。

「が、はっ！！」

背中を叩きつけられる。

「戦う気はないようだな」

桐島はもう一度右手を上げた。

「ま、待ってくれ！！ 殺さないでくれ！！」

太陽は叫ぶ。

「何でもする！！ お願いだ！！」

太陽は土下座した。

「貴様も名手だろう。戦おうという気はないのか」

「お願いします!! お願いします!! 殺さないでください!!」

太陽は懇願し続ける。泣きながら懇願し続ける。

「あいつなら出て行って五分も経っていない!! これでどうだ!？」

太陽はマシロのことを平気で伝える。

「.....」

桐島は太陽を見下ろしていた。蔑むような目で、ゴミでも見るような目で。

「お願いしますお願いしますお願いしますお願いしますお願いします」

泣きながら懇願し続ける。

「.....ふん、下らん。貴様は下らん人間だ。殺す価値もない」
そう言って桐島は割れたベランダの窓に向かってそして振り向いた。

「貴様は一生地べたを這いつくばっている」
そして出て行った。

「.....」

太陽は土下座から横向きに寝そべった。

「う、くう!」

太陽はうずくまって泣いた。

「うわああああああああああああああああ!!」
泣いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1438z/>

いつか太陽に

2011年12月18日23時51分発行